

第 24 回女子美パリ賞報告書

吉田 ゆう

目次

【プロフィール（略歴・展覧会歴・受賞歴）】

【国際芸術都市滞在の動機・目的】

はじめに

【制作・研究活動概要】

フィールドワーク

- ・セーヌ川の観察と調査
- ・セーヌ川の源流と河口への訪問
- ・河口訪問
- ・源流訪問

リサーチ

- ・サメの消費と調査
- ・フランス北西部での調査
- ・フランス、近隣国でのサメ漁の現状
- ・ポルトガルでのサメ料理
- ・絵画から見た漁業背景

制作発表

- ・前提
 1. セーヌ川をフィールドワークする理由
 2. 人間とサメの関係性
 3. サメの存在が示すもの
- ・オープンスタジオ

国際芸術都市 (Cite internationale des arts)

- ・国際芸術都市での交流
- ・様々な発表手段とプロジェクト

フランス語

【結び】

個展

- 2023 「Safety Zone」 OPEN STUDIO Cite internationale des arts(パリ)
2022 「わたしとさめのあいだ-Between the shark and me-」 gallery N (名古屋)
2020 「Tracing the sea」 art is calling 01 BUKATSUDO GALLERY(神奈川)
2018 「サメが泳ぐ都市」 LYURO -THE SHARE HOTELS (東京)
2016 「生きる時間」 BUKATSUDO GALLERY (神奈川)
- ## グループ展
- 2023 ファンダメンタルズ・フェス2021-2023 東京大学駒場博物館(東京)
ファンダメンタルズフェスmini in メタバース(Online)
2022 ファンダメンタルズフェスmini 東京大学駒場小空間(東京)
2021 SICF22 SPIRAL INDEPENDENT CREATORS FESTIVAL EXHIBITION 部門 スパイラルホール(東京)
2019 黄金町バザール2019「ニューメナジェリー」(神奈川)
2018 黄金町Artist in Residence 成果展 日ノ出町スタジオ(神奈川)
黄金町バザール2018「pass by: 動くものと動かないもの」展 黄金スタジオ(神奈川)
2017 Creative Shop & Gallery 北仲COOP 北仲コープ(神奈川)
BankART Artist in Residence OPEN STUDIO 2017 BankART Studio NYK (神奈川)
2016 PAT in Kyoto 第2回京都版画トリエンナーレ 2016 京都市美術館(京都)
“THE INTERNATIONAL LITHOGRAPHY COMPETITION LITHO-KIELCE
2015 “The Upper Gallery and Lower Gallery(ポーランド)
2015 「廻り道」展 Arts Chiyoda 3331 アキバタマビ 21(東京)
「アーティストブック - それぞれの版表現 -」ギャラリーなつか・Cross View Arts(東京)
2014 雲林国際現代美術交流展 雲林縣政府文化處陳列館(台湾)
Artist Book - 旅を読む- Arts Chiyoda 3331 アキバタマビ21(東京)
「版画系」文房堂ギャラリー(東京)
2012 版の時間/Age of Prints 女子美アートミュージアム(神奈川)
跨越- 国際版画展 嘉南薬理科大学文化藝術センター(台湾)
国立台湾芸術大学・女子美術大学 交流展 女子美アートミュージアム(神奈川)

プロジェクト

- 2022-2023 ファンダメンタルズ プログラム
ペア研究者福永真弓氏との共同制作作品の展示・交流発表
2020-2022 「art is calling」企画展 企画・運営参加 株式会社 Ribeta 運営スペース BUKATSUDO 主催(神奈川)
- ## 受賞
- 2022 女子美術大学100周年記念大村文子基金 パリ賞 受賞
2009 全国大学版画展 収蔵賞 受賞
- ## パブリックコレクション
- 町田市立国際版画美術館(東京)
女子美術大学(神奈川)
嘉南薬理科技大学文化藝術センター(台湾)

【国際芸術都市滞在の動機・目的】

はじめに

第1に、日本では、河川や海という環境を舞台に制作を続けてきた。大陸国ヨーロッパの根本的な環境の違いについて、環境的位置付けを自身の作品に展開できるのか、フィールドワークを主とした創作活動を試みる。

第2に、学生の頃から日本国外での創作活動に関心を持っていたこと。卒業後、同期や仲間の芸術家たちが渡航し外国での活動を知る中で、同様に活動できる機会を探していた。国際芸術都市には世界各国からの芸術家たちが滞在するため、様々なアイデンティティによる現代美術のムーブメントや関心にアクセスできること。日本という島国では発生しないアイデンティティを介した多様性に富んだ文化芸術を異なる環境で体験すること。

本報告書は、国際芸術都市での滞在で得られた、パリを中心に環境の違いから見る文化芸術の体験とリサーチベースの作品制作プロセスを記す目的として作成。
期間は2023年4月12日-2024年3月28日まで。

私はサメをモチーフとし、人とサメの関係性について個人的なリサーチ結果の下、作品に展開する。主に都市河川や海にまつわる環境をリサーチ、反映する作品を制作してきた。島国の日本は四方を海に囲まれ、海に流れ出る河川も多く存在する。気候変動など世界共通の問題に目を向けた時、日本の環境だけで制作する事に不具合が生じ始める。海は繋がっていても、島と大陸では地質や地形が大きく異なることを体感する必要があったこと、自身の作品が環境の違いにも成立するのか、見てみたかったのだと思う。

国際芸術都市は、パリの中心、4区のマレ地区というセーヌ川沿いに建っている。セーヌ川といえば世界的にも有名な都市河川の一つだ。自身が作品の舞台としている環境の立地が揃っていること、またパリの街の形成史として国際芸術都市が建っている立地がフィールドワークに適していることが、パリ賞へ志願する大きな要因の一つであったことに間違いはない。

国際芸術都市とは、世界各国から芸術家が集合し共同生活をしている。その異様さに関心を持ちつつ、自身が多くの芸術家と交流を持てた訳ではないが、このような集団の場があることが、外国で初めての創作活動に大きな影響を与えたことだろう。

学生の頃から外国での創作活動には関心があった。同期や仲間の芸術家たちが渡航し、外国での制作活動の様子を見聞きする中で、自身も日本国外での創作活動の機会を模索していた。留学、AIR、公募展など様々な活動の手段がある中、国際芸術都市の存在も認識しており、女子美パリ賞の存在も意識していた。初めて2020年度に応募するが選外となる。そのまま世界はCOVID-19のパンデミックへと突入していった。明らかに世界中で時間が停止し、日本国内での制作発表の形式も不自由になり、大きなフラストレーションが溜ま

っていく。そのような時間経過も再度パリ賞に挑戦する要因の一つになったのかもしれない。

国際芸術都市に滞在・制作したことで、環境や集団の違いを感じたことによる自身の中の気づきを記せたら良いと思う。

【制作・研究活動概要】

派遣期間: 2023年4月3日～2024年3月18日

- 4月 国際芸術都市周辺～パリ市内、セーヌ川をフィールドワーク
- 5月 パリ市外、セーヌ川をフィールドワーク、Beaux-art 見学
France Deauville, Honfleur セーヌ川河口周辺地域 訪問
- 6月 Switzerland Luzern, Basel Art Basel 2023 訪問
国際芸術都市同滞在期武蔵美パリ賞受賞者企画、オープンイベントに協力、参加
- 7月 Nederland Amsterdam 共同研究者とサーキュラーエコノミー施設 見学
- 8月 France Etretat, Le Havre セーヌ川河口周辺地域 訪問
- 9月 France Sources Seine (Dijon) セーヌ川源流周辺地 訪問
United Kingdom London 訪問
- 10月 France Lille 訪問
- 11月 Open Studio (official)
- 12月 Portugal Lisboa 訪問
- 1月 Open Studio (unofficial)
- 2月 France Bordeaux 訪問
- 3月 パリ市内セーヌ川全域 撮影、制作

フィールドワーク

フィールドワークの手法として、主に観察法と観測を採用。

私はパンデミックが始まる一年前に、以前のパリ賞受賞者、角谷沙奈美氏を訪問していた。

記憶を辿れるほど土地感覚は残っておらず右も左も分からないが、セーヌ川河岸の遊歩道へ降り、川沿いを兎に角歩く。私のフィールドワークはセーヌ川沿いを歩く事から始まった。

徐々に日数が経過すると、パリで勉強している日本人の芸術家仲間や、国際芸術都市に滞在している他の日本人の芸術家たちと交流する機会が増える。生活の術や今までの経験など情報交換を行うことで、徐々にパリの街の輪郭が見えてきた。

・セーヌ川の観察と調査

パリの街の輪郭が見えてくると徐々に遠くへ行くことができた。まずは、グーグルマップのセーヌ川を辿ってみる。セーヌ川沿いを歩いて初めに気付いたことは、河岸から水面まで距離があること。この水位は季節によって大きく変化することを後に体験することとなる。季節的に河川の水位が下がる為、なるべく水面にアクセスできる河岸がないか、マップ上を一つずつチェックする。チェックした場所をマッピングし記録することを繰り返した。次に、チェックした水面へアクセス可能な現場を直接訪問した。河川の水中環境を河川上空より確認。そして、セーヌ川の水を採取し透明度のチェック後、濾過をすることで生活(草木への水やりなど)や制作に活用を試みた。

セーヌ川は運搬水路としてはもちろん、街の生活排水路としても使用されている為、河川は汚濁したイメージが強い。またセーヌ川には、景観の一つでもある船上生活をする人たちも多くいる。よって、生活排水の影響は現在もあるが、(船上生活者にもオリンピックでの水質改善のため、生活排水を下排水システムに接続する対策を市が要請しているとのこと)環境対策や2024年オリンピック開催に向けて様々な水質改善プログラムが実行され、数年にわたる水道・衛生施設などのプロジェクトも進んでいる為、セーヌ川の水を観察してみると、想像より澄んでいる事が確認された。

人の営みの全てが環境に悪影響を及ぼす訳ではなく、水温や水中生物の栄養素になることもある。セーヌ川には多くの水草が自生していた。また、セーヌ川では釣りをする光景を目撃した。セーヌ川で釣りをするためには、釣りをするための許可スタンプを購入する必要があるようだ。パリ市外近くのセーヌ川に浮かぶ島に中にある公園では、子どもたちに釣りを教える教室まで存在する。釣りが盛んということは、多くの魚が生息しているということも分かる。河岸の壁面に生えた水藻を採餌しに、稚魚や鴨、白鳥と様々な野生生物を見ることができた。船上レストランが停泊している河岸との間にもたくさんの魚が生息することを確認し、水深が深い場所では比較的大きな魚も目撃することがあった。

これだけ、河川が近い場所に生活していると日常的にセーヌ川を観察することが容易であった。



・セーヌ川の源流と河口への訪問

このフィールドワークの指標には、セーヌ川の源流から河口までの全貌を理解し、川が持つ自然環境や人間活動との関係を発見し作品に反映させることが必要である。

セーヌ川（セーヌがわ、la Seine [s n] ）は、フランス北部を流れる河川である。流域もほぼ全体がフランスに属している。全長 780km は、フランスではロワール川に続いて第二の長さである。

ディジョンの北西 30km の海拔 471m の地点に源を発し北西に向かい、首都のあるパリ都市圏を流れ、ル・アーヴルとオンフルールの間でセーヌ湾に注ぐ。

引用元：著作権-Wikipedia

上記にある様、河口はル・アーヴルとオンフルールの間流れ出る。左岸、右岸を別けて訪問することにした。

・河口訪問

まずは左岸側オンフルールへ訪問。オンフルールにはビーチで有名なドゥーヴィルという町を経由する必要があった。オンフルールは画家のウジェーヌ・ブーダンや作曲家のエリック・サティの出身地であり、旧港を中心とした小さな美しい避暑地であった。セーヌ川の河口幅は 5km にも渡り、セーヌ湾と呼ばれるほど海と化しているようだった。セーヌ川河口があるノルマンディー地方は、主に岩石地質だが、海底は砂質で、セーヌ川河口付近は砂泥質で白濁していた。右岸側は製油、造船、機械などの産業が立地する工業港として栄

えたル・アールという町。クロード・モネが夏の避暑地として良く訪れ、たくさんの風景画を残している。海岸線を少し北上するとエトルタという海に石灰岩の断崖が張り出ている砂利の海岸が続く町があり、同じく風景画に多く描かれている。右岸は工業港の為、河口沿いに直接訪問することは少し困難であった。

河口では、周辺環境含め海としての役割が見受けられた。



・源流訪問

次に、源流へ訪れる。セーヌ川の始まる場所。

セーヌ川の水源は、Source-Seine(ソース・セーヌ)という村にある。フランス中東部に位置する Dijon という地方都市から北西に 35km 離れたラングル高原の国立森林公園内にある。水源を保護するための人工洞窟が設けられ、湧き出る水源から少しずつ流れ出ていた。水源を見ている限りでは、海に流れ出るような大河川の始まりとは思えないほどの水量と水流であった。水源地は、考古学的に重要な遺跡地でもある。ガリアケルト神話に出てくる水に親和性を持つ女神セクアナが崇拜の実践の中心に置かれ、聖域として収容される。発掘では聖地巡礼の遺跡として出土している。ガリア人がセーヌの源流を崇拜し清めを行い、また当時の治療としての役割をセーヌ川の水に求めていたのかもしれない。木と石または青銅でできた解剖学的な奉納具が多く出土している。

ラングル高原は、シャンパーニュとブルゴーニュの境界に位置し、堆積岩、石灰岩で構成されている巨大なカルスト地形構造になっている。源流からパリの方向へ少し進んだ先の森を抜けると、巨大な池(水溜り)が現れる。巨大な池からようやく川らしいセーヌ川が流れ出ていることを確認した。マルヌ川、オーブ川、ムーズ川とフランス北部の他のいくつかの重要な川の水源が存在する。訪問したラングル高原はカルスト地形で、長い年月を経て堆積した石灰岩が風化し、複雑な地形を形成している。この特異な地質は、セーヌ川の豊富な水流の理由を説明できる。石灰岩の多孔性により、地下水が多く含まれ、そこから湧き出る水がセーヌ川の流れの源となっていること。これにより、セーヌ川は広大なフランスの大地を流れることが可能である。



現地へ訪問したことで、直接石灰岩盤の断崖や砂利を見ることができ、中生代からの大陸地殻として存在している地質であること、元々海の底であることを確認し、セーヌ川が780kmにも渡って海へと流れる水量や水流に繋がっている事を示唆していると理解することができた。

このフィールドワークを通じて、小さな源流から始まり、次第に集まり広大なセーヌ川となってパリを経て大西洋へと注ぎ込む地理的プロセスを目の当たりにし、これらの地質的、環境的要素をどのように反映させるかを考える上で、非常に有意義な知見となった。

リサーチ

セーヌ川のフィールドワークにあわせ、港町を訪問し、地元の鮮魚市場で大西洋に生息するサメの調査を行う。

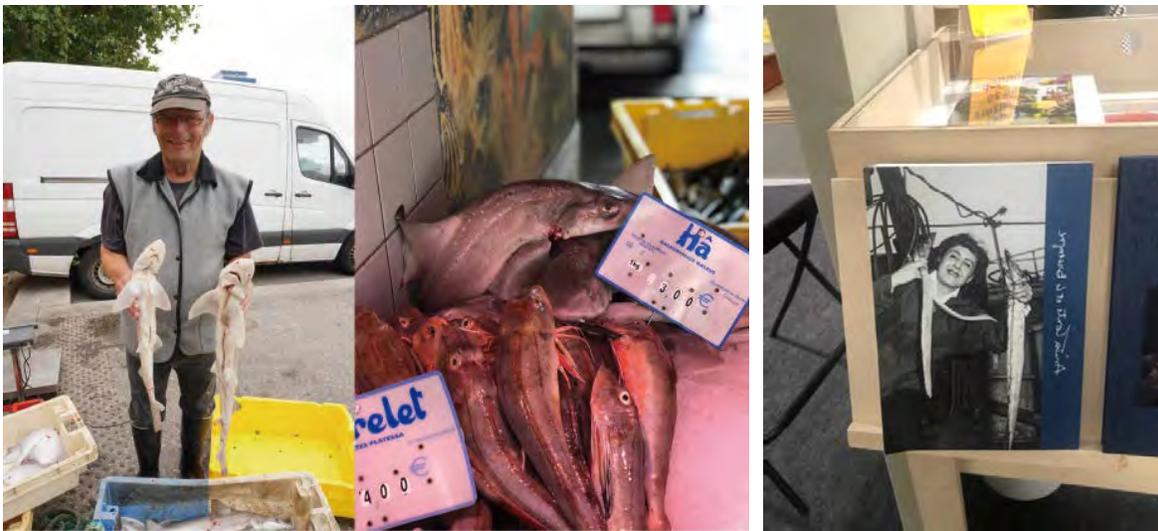
・サメの消費と調査

日本では限られた地域でのみサメを食する文化がある。特に漁村では市場に出回らず現地だけで消費されていることが多い。ヨーロッパでも同様にサメが消費されている地域がある。特に漁業や貿易で栄えている港町の市場には、豊富な魚種を見ることができる。ヨーロッパでは、南に行くほどサメが消費されることが多い。多くの場合、サメは地元の呼び

名で売られているため、サメが食されていることはあまり知られていない。しかし、古くからサメ漁をしている地域もあり、フランスや近隣のスペイン、ポルトガルではサメの食文化が残っている。

・フランス北西部での調査

直接調査したル・アーブルでは、地元の小さな鮮魚市場でホシザメという小型のサメが一匹丸ごと 3€/kg という安価で売られていた。市場周辺でサメを使った料理が提供されているか聞き取り調査を行うも、レストランでのサメ肉提供は見つからなかった。これは、地元の漁師が他の魚と同時に水揚げするため、産業化されていない状況が背景にあると推測される。また、長い沿岸線を持つブルターニュでは、豊富な海洋性動植物が生息する。ブルターニュ半島から西に広がる大西洋の一部は、ヨーロッパ有数の危険な海域であるが、激しい海流から流れるブルターニュの海水は、大型のウバザメなど多くの海洋生物が引き寄せられる。PARIS PHOTO という写真作品中心の世界的アートフェアで見つけた「Anita Conti et la Bretagne」という写真集では、写真家であり、最初の女性海洋学者であるアニタ・コンティが自らトロール船に乗船し、男性社会である漁業環境に参戦し、現場のレポートやポトレートを記録撮影している。その写真集の中にもウバザメ漁の記録が残っている。また大陸棚には小型のハナカケトラザメが生息し、北西部から西部にかけて生活圏に比較的馴染みのあるサメとされている。



・フランス、近隣国でのサメ漁の現状

フランスでは、大西洋、地中海、ヨーロッパ南部、アフリカと、近隣諸国や同領地までに渡り、幅広い海域との関係性でサメ漁が行われている。世界的なサメ種の急激な減少に伴い、水揚げ量の規制が年々厳しくなり、活用資源としての水揚げは減っている。それでも、

古くからサメ漁を行い、郷土料理にサメを使う地域では、レストランでもサメ料理が提供され続けている。近隣国のスペインは世界的にもサメ漁業の主要国でもあり、北西部、南部に分かれ歴史あるサメ漁業やサメ料理の食文化が今でも残っている。スペイン北西部、ポルトガルとの国境近くに位置するガリシア地方には、サメ漁船が多くある。スペイン南部アンダルシア地方では、サメの煮込みスープが有名で、南部は、ポルトガルからサメを供給している。

・ポルトガルでのサメ料理

ポルトガルも昔からサメ漁が行われており、郷土料理の一つとしてサメを使用している。リスボンを訪れ、実際にサメ料理を食した。サメ肉のスープとフライが一般的で、以前はよく食べられていたようだが、近年ではあまり出回っていないのが、一般的な食事としてではなく伝統的な郷土料理として比較的高級なレストランで提供されているようだった。ポルトガルでは食材にアブラザメ科の種類が使われていた。ポルトガル国境付近のスペイン北西部ガリシア地方で漁獲されているサメはトラザメ科の種類が主に水揚げされているが、リスボンでは主にアブラザメ科の種類が食べられている。大陸は海岸線も繋がっていて、各海域と隣接しているため、生息種が少ない場合でも、複数の種が食材として活用され、また同国内でも各地域によって食べられている種が変わるということを見ることができた。



・絵画から見る漁業背景

港町は貿易拠点でもあるため、大小関わらず美術館が存在する。貿易業で築いた富を象徴する豪華絢爛な調度品や、各地の港文化は絵画に描かれることが多い。当時の漁業や市場の情景を知る手がかりの一つにもなる。漁港や市場を表した絵画にはサメも描かれ、当時からサメ漁もしくはサメを食料とし捕獲していたと考えられる。美術品は、世情や環境をも表し、時代を超えて人とサメの関係性について読み取れる情報を収集し、検証の役に立つため、美術館への訪問も研究調査の一環となる。

このフィールドワークと研究調査を通じて、セーヌ川環境から港町の鮮魚市場まで、幅広い視点でサメに関する情報を収集することができた。フランス北西部やポルトガルの鮮魚市場での調査から、サメの消費や食文化の現状を理解し、絵画を通じて歴史的な視点からも考察することができた。これらの知見を基に、サメが人々の生活や文化に与えてきた影響や関係性から見える、現在の環境や生態系の変化を作品に反映できると実感した。

制作発表

・前提

1. セーヌ川をフィールドワークする理由

セーヌ川をフィールドワークの対象とした理由は、都市河川が人間社会にとって最も身近な自然環境の一つであり、自然環境と人間の関係性を表現するには理想的なフィールドであること。都市河川は、環境と人間活動の相互作用を直接観察できる場所であり、環境保護や都市計画における重要な指標となる。

2. 人間とサメの関係性

私の研究テーマは、人間とサメの関係性について考察すること。サメは、他の魚種と同様に人間にとって資源の一つとして利用されており、またサメという異物は、映画や漫画などありとあらゆる想像の中で、我々にとって日常に突然現れる異物、恐怖のメタファーとなってきた。

3. サメの存在が示すもの

この二曲面から見て、サメの存在は人間の生活に深く関わりを持っていること、環境を表すシンボルになれることが分かる。サメの存在は、人間社会の中で今ある環境のあり方について、シンボリックな対象の一つになると考える。

サメは、人間社会と自然環境の関係を理解する上でシンボリックな対象となる。サメの存在を通じて、以下の点が浮き彫りにできる：

環境のシンボル：サメの存在やその生態は、海洋環境や生態系の健康状態を示す指標となるため、サメが生息する環境の質や変化を調べることで、私たちの生活環境についても理解が深化する。

人間と自然の関係：サメは自然環境の一部でありながら、私たちの日常生活や文化にも深く関わっていること。サメを通じて、人間と自然の関係性を探る手掛かりになる。

人間社会における現在の自然環境を把握するために、人にとって極位性の強いサメを都市河川に泳がすこと、呼び寄せることで、将来の環境のあり方について検証することを目的とした、サメの存在についての考察、環境における変化によるサメとの関係性の築き方を投影し、作品に展開していく。

滞在で制作する作品の1番の目的は、セーヌ川を泳ぐサメの風景を創作すること。日本から持参した小型のサメのヒレにおもちゃの水中モーターを取り付けた模型を用いて、セーヌ川に泳がすこと。

セーヌ川を泳ぐ魚の一つとして、サメが都市河川を泳ぐ風景を見てみたかった。

まず模型を着水させるローケーションを探す必要があった。フィールドワークを通じて、セーヌ川の水位の変動が大きいことが確認できたため、テストを兼ねて、セーヌ川に着水させる前に、運河や庭園の池や川で走行実験を行なった。セーヌ川には荷揚げのような船から乗降するための場所がいくつか存在する。走行実験を何回か繰り返した後、実際にセーヌ川へ着水するも、走行実験を行なった運河や庭園の池や川は風や波、水流などの外敵要因が少なかったため、セーヌ川での遊泳には外的要因に合わせて模型の調整が必要となった。

セーヌ川は蛇行しながら流れているにも関わらず、水量が多いためか水流が速く、また護岸の風化による川底や側面の形状が複雑のためか、定かなことは不明だが、不思議な水流域が発生し、河川中心部に向けて模型の長時間遊泳はとても操作が難しいことが判明した。模型の構造がシンプルなため、河川の流れに任せる必要があった。天候や河川の状況、周辺環境とのタイミングを調整し撮影を行なった。

撮影と並行して、中型のサメのヒレの立体作品を制作した。かつて海の底だったセーヌ川やパリの街にサメが泳いでいたという形成史を反映する風景を描くためのもの。

私は写真作品を主に制作している。最近では、日常の情景に考察を反映した場面作りを行い、写真に収める。サメを表すためにシンボリックなサメの背鰭を制作し、目印のように風景に取り入れる。パリ市内のセーヌ川を東から西へとサメのヒレの立体作品と共に移動し、パリらしい背景の下で撮影を行なった。

移動が必要なため、立体作品は軽量化する必要があった。今回採用したのは、張子の原理で立体物を制作する方法である。普段とは異なる材料や制作方法を使用し、様々な素材を検討、実験しながら制作を進めた。

・オープンスタジオ

滞在制作の一環として行われたオープンスタジオでは、フィールドワークと実験的な創作活動を組み合わせ、自身の滞在スタジオで発表を行なった。国際芸術都市では、週に一度、芸術家それぞれの創作活動や滞在の記録を発表するオープンスタジオが開催されている。基本的に日常生活も同時に送るスタジオで公開を行うため、各自様々に工夫をしていた。生活の痕跡が見えるスタジオもあれば、展示用に整えられたスタジオもあった。

コンセプト:Safety Zone

私はセーヌ川のサメを想像する。

セーヌ川におけるサメの存在をシミュレーションすることで、野生動物と人間の共存について考察する。

人工的な環境は人間の介入によって一定のバランスを保つことができ、その中で多くの野生動物が生活し、共存することが可能である。

人間が作り出した快適な人工環境が、サメにとって安全な場所であるならば、人間が作り出した人工環境が、私たち人間にとっても良い環境であり安全な場所（safety zone）であるかどうか、環境に対する境界の再構築を定義する。

サメ＝人間が survive できるためには、サメが共存できる環境が必要であり、サメは人間が生存できる空間を示すアイコンであることがわかる。

気候危機の時代において、サメはもはや恐怖の象徴ではなく、人間にとっての安全性（safety zone）を象徴する生き物になるだろう。

[Safety Zone]と題したオープンスタジオは、セーヌ川を舞台に、創作活動における環境との対面を通じて、創作過程での心境の変化を、入り口からメインスタジオへの動線を意識した展示構成を行なった。

サメに抱く恐怖のイメージとの訣別を宣言するための祭壇を設け、恐怖のイメージから、安全性のシンボルへと変化するセーヌ川に泳ぐサメのビデオ作品へと進む。現在のセーヌ

川の環境調査と、過去と未来を貫くサメというものを、オブジェと風景写真作品の展示構成で発表を行なった。

このオープンスタジオには、シテに滞在する芸術家から一般の人々まで幅広い鑑賞者が訪れた。彼らとサメに対するイメージや環境問題について意見交換ができ、有意義な場となった。訪れた人々との対話を通じて、サメが恐怖の象徴から安全性のシンボルへと変わる可能性について、さらに深い理解を得ることができたと思う。



国際芸術都市 (Cite internationale des arts)

滞在制作を行なった国際芸術都市(Cite internationale des arts)は、60カ国からの芸術家たちが、常時300人以上滞在している巨大な文化芸術にまつわる居住施設だ。

1950年代に国際芸術都市設立のプロジェクトが始動し、1960年代初頭には建設が開始されたとある。世界中のアーティストに首都を開放したいという深い願望の基、様々なプログラムによって訪れる芸術家たちは、そこを拠点に生活し創作活動を行う。そしてどんな条件下にいる芸術家にも開放され、自国で創作も生活も困難な芸術家たちへの表現の自由を確保するシェルターの役割も果たしていた。コロナ禍もロックダウンは実行されたものの、芸術家たちは滞在を続けた。

・国際芸術都市での交流

滞在期間も様々で、一般的に3ヶ月から半年で入居者が入れ替わることが多いため、数多くの芸術家との交流が可能であった。交流をメインとした創作を行う芸術家もいた。美術家も音楽家も滞在しているため、芸術全般における交流が行われていた。その他に国際芸

術都市が主催するプログラムもいくつか行われ、毎月のオリエンテーションから展覧会のツアー、また国際芸術都市内にあるギャラリーで主催の展覧会も開催され、多くの人たちが訪れていた。

日本人の芸術家も多く滞在しており、また日本からヨーロッパへ留学し、その国で創作を続けている芸術家が国のプログラムから派遣され滞在している場合などもあったため、本当に多くの日本人芸術家と交流を持つことができた。またパリで活動している日本人芸術家とも多く交流を持つことが出来た。

・ 様々な発表手段とプロジェクト

国際芸術都市では週に一度、オープnstudioを公式に開催しているが、オープnstudio以外にも様々な手段で芸術家たちによって発表が行われていた。

武蔵野芸術大学から派遣された芸術家の一人がオーガナイズしたパフォーマンスイベントに参加し、私はセーヌ川の水を汲み濾過するという短いパフォーマンスに、イベントの記録撮影を行なった。パフォーマンスイベントは5日間に渡るもので、パフォーマンスからワークショップまで幅広い内容であり、国際芸術都市に滞在する芸術家や、パリで留学している芸術家、パリで活動している芸術家、そのパフォーマンスのためにパリに訪問した芸術家など様々な状況の芸術家たちによって発表された。



ドイツの芸術家兼建築研究者が「KIOSK」という交際芸術都市内のコミュニティを確保するハブを立ち上げた。このKIOSKで国際芸術都市に滞在中の日本人芸術家と共に、他の国の滞在中の芸術家から母国の伝統的な料理のレシピを提供してもらい、共同で調理、提供する企画を行なった。提供されたレシピはzineにまとめられ、材料費以外の経費は全てMEDECINS SANA FRONTIERESに寄付を行なった。



その他にも、非公式で二回目のオープnstudioを行ない、滞在スタジオの窓を使ったスクリーミングを実験的に公開した理、パリで知り合った日本人の芸術家家族の子供達と一緒に「セーヌ川にサメが暮らしていたら」というセーヌ川の環境を探索しながら制作ワークショップを実験的に行なった。



このように様々な活動が、日常的に芸術家たちによって繰り広げられていた。日常生活と共に、常に創作や交流が交わされ、この規模で都市の中心に置かれる国際芸術都市は、非常に特異性の強い有意義な文化芸術の場所と言えるだろう。私自身にとって大変貴重な経験であり、国際的な視野を広げる機会となった

フランス語

国際芸術都市内では、外国から多くの芸術家が訪れるため、フランス語のクラスが開設されていた。初心者向けのクラスと対話メインの中級クラスに分かれていた。

自身の語学力に全く自信がなく、事前に基礎的なフランス語の勉強はしてきたものの、一から初心者コースを受講した。

世界各国から芸術家が集まっているため、やはりフランス語に関しては全く話せない人達も多かった。同じ状況をシェアすることで、クラスメイトの芸術家たちとは比較的仲良くなり易かった。中でも、私自身とても親しくなった韓国の音楽家がいる。彼女は、韓国の琴「カヤグム」の奏者だった。お互いのフランス語レベルは同じだが、英語力には大きな

差があったにも関わらず、翻訳ツールなどを活用し良く話をしてくれた。彼女のお陰で、国際芸術都市以外で滞在制作をしている韓国の芸術家たちと知り合うことが出来た。

フランス語の会話力としてはあまり伸びなかったものの、フランス語クラスを通して芸術家たちとの交流も多く、特に彼女との交流は今後の人生にも続く重要な交流となったと思う。



【結び】

私がパリに到着した頃、フランスでは反年金改革デモがまだ続いており、過激な運動は一段落していたものの、その残響を感じた。ニュースで目撃していたデモ行動を直視した衝撃は自身が外国に暮らしているという実感を強まった瞬間となった。普段から、戦争や侵略、迫害行動など、世界の情勢が目まぐるしく危うい方向へ動いていることを、より強く感じる機会だった。

国際芸術都市内は常に安全が保たれた環境であったが、到着したばかりの頃、ウクライナ人のダンサーが主催するダンスワークショップに参加した際、同じくして参加していたイランのアーティストカップルが、ウクライナ人の彼女に「あなたの国も大変ね」と話していたことがとても印象的に残っている。

ガザ地区への侵攻が始まった時も、反対運動や反対表明を行う芸術家たちがたくさんいた。

意思表示を表す日常がある中で、私自身何か表明する事はできなかった。世界各国の芸術家と同じ空間を共にして、各アイデンティティも様々で、その中で自身が述べたいことは何か、体感し、より深化に思考できたことは、大きな影響を与えたに違いない。

反対に、年明けに起きた能登半島地震の状況は、普段より強く私の意識に残った。情報が限られている中でも、東日本大震災の経験が我々を何かを変えたということ。地震大国に暮らす日本人としての体感の違いを「震美術論」という本を読みながら考えた。

想定していた国際芸術都市滞在の動機と目的は、実現できたと思う反面、現実の環境と周りとの関係性から受けた影響は想定以上だった。実体験と感覚的に感じたことは別物であるが、フィジカルとメンタルは最終的に合流するのではないか。人間社会が抱える問題を見ても、地理的環境から受ける影響は精神に繋がっていることを実感した。

終わりに、国際芸術都市滞在における研究、創作活動の機会を与えられたことを、関係各所に向け、ここに感謝の意を表す。